

終戦の年の十二月に入ソ、イルクーツクより山の中へ入りました。何という地名であったのか一切記憶がありません。衛生兵であったので医務室勤務とか言われましたが、医務室とは名ばかり、薬もなければ包帯もなし。こんな有様でいかにしてまともな治療ができるのか、不思議に思っておりました。作業員に欠員ができるのと作業に駆り出されました。仕事は伐採でしたが。大きな樹木を二人でノコギリを使って切り倒すのですが、なかなか呼吸が合わず苦勞しました。

作業の帰り、疲勞した身体に何キロもの行軍は、栄養不足のため思うように足が出ません。座り込んでそのまま眠ってしまう兵隊もありました。自分の事で精いっぱいなの我々にはどうすることもできません。恐らくそのまま凍死したものと思います。そんな事がたくさんあったようです。

最初のうちこそお互いに励まし合ってきましたが、だんだんと仲間意識も薄れ、考えることは自分の事ばかり、人間とは何と悲しい生き物かと、今思い出すたびに慚愧の念にたえません。

せめて、安らかに眠ってくれとひたすら祈る毎日です。

## 我が父・長崎博良(旧姓・相澤)の

### シベリア抑留記

熊本県 松本 聡子

大正十(一九二一)年生まれの父は今年七十九歳。平成元(一九八九)年に咽頭ガンによるのどの全摘手術、そして平成十一年には下腹部のガンによる摘出手術を受けた。以来すっかり足腰も弱り、ほとんど寝たきりの生活になってしまった父。父の体はやせて小さくなり、手も足も驚くほど真っ白でか細い。しかし十五年前、三年間、父はあの過酷なシベリア抑留生活を耐えた強靱な肉体と精神力の持ち主でもあるのだ。今や声は失い、しゃべることもできなくなり、また目はかすれ、体力的にも書くことがおぼつかなくなってしまう父に代わって、娘の私が、昔、父に聞

いた話や父の手記、関連書物、そして父との筆談を頼りに、父のシベリア抑留生活をまとめてみようと思う。

昭和十八年、当時京都帝国大学の三年だった父は、その年、繰り上げ卒業させられ、いったん国際電電に就職したが、間もなく召集令状を受け、北滿二一九部隊（大興安嶺部隊）に配属された。父の階級は少尉、役割は小隊長だった。昭和二十年八月九日、長崎に原爆が投下されたその日、満州各地では午前零時を期してソ連軍が攻め込んできた。当時、日ソ中立条約の有効期間中であり、ロシアの参戦はないものと思っていた日本側にとっては、まさに寝耳に水の出来事だった。八月十五日、日本がポツダム宣言を受諾し無条件降伏したことで、八月十七日、満州にも終戦の通告があり、ソ連側も停戦し武装解除した。その日、父ら二一九部隊は興安嶺の山中で終戦を知らされ、そのままフルルキー停車場まで行き、そこで一週間滞在。一週間後の夕方から翌日の昼までの強制歩行でチチハルに

移動した。ここで父らは「捕虜」とは一言も知らされず、「寺田富吉少佐の指導する作業隊（ポスローター）」に配属され、チチハルを出発し、楡樹屯経由で国境の町満洲里からソ連に入った。その後十日間のシベリア鉄道強制歩行の旅を経て、九月二十六日、クラスノ第四収容所に抑留され、父の三年間の「シベリア抑留生活」は始まった。

経済学部卒の父は、ソ連に入れば日本の貨幣は何の価値もなくなってしまうと、すべてタバコに換えて入ソしたという。タバコは捕虜生活では「タバコ飢餓」という言葉が生まれたほど貴重な物で、父の機転は大いに役に立ったそうだ。シベリアの長い冬は、一年の三分の二以上の期間を占める。零下四〇度にまで下がることもある寒さ。零下一度で寒さに震える私などには想像もつかない。水を地表に投げると、地表に着くまでに氷になる。吐いた息が凍りつき、放出する水分が灰のように自分にふりかかってくる。耳を澄ませばその音が聞こえる。それでも、六月になればシベリアにも遅い春が訪れる。しかし今度は、南京虫・蚤・シ

ラミなどとの戦いが始まる。南京虫のかゆさは強烈だった。つぶすと異様な臭気を発し、殺しても殺してもどこからともなく現れて、一晩じゅう眠る暇がない。飢餓も大敵だった。わずかな粥と黒パンの食糧、あとは干からびたジャガイモの皮。下痢は命取りにもなったので、その防止のため「炭」を食べていた。栄養失調と疲労により、体力は普通時の五分の一ほどに落ちていた。

父の労働は石炭の採掘作業だった。劣悪な安全設備の坑内、ロシア人囚人も多く、現場には殺伐とした雰囲気のみなぎっていた。しょっちゅう落盤や爆発事故が起き、粉塵もひどく、十二年前、咽頭ガンになったとき父は、「シベリアの採掘作業で石炭粉をいっぱい吸ったからこんな（咽頭ガン）になったんだ」と言っていた。寒さと飢えと疲労で、一夜に何人もの仲間が死んでいくこともあった。酷寒のため遺体はカチンカチンに凍り、白ろうのようになった。「今日の友の身の哀れさ、明日は我が身か」と呆然と虚脱の世界に佇んでいた。そして、それでも「俺達は絶対生きて帰る

ぞ」と必死に仲間と励まし合っていた。

無口で自らをあまり語らなかった父。父が四十五歳の時に生まれた私は、父とは何の接点もなく、父のころなどほとんど何も知らなかった。今回これをまとめることで、父のこれまで生きてきた人生を少しだけ理解できたような気がしている。今日も父は毅然とした表情でベッドに横たわっている。シベリアのつらい日々を思い出すこともあるのだろうか。シベリア抑留を初め、戦争のことを語る人は段々少なくなっていくだろう。しかし、決して忘れてはならないことだ。二度とこのような悲惨なことが繰り返されないように、これらのことを次世代に伝えるため、今私たちは知っておく義務があるのだと思う。

## 戦闘と抑留体験記

熊本県 井場 寿春

昭和二十（一九四五）年八月九日、私はその日、第